

素晴らしき中途半端

牧野佳奈子

DiVE.tv

そう言われて嬉しい人なんているでしょうか。とりわけ日本では、“中途半端”という言葉はまるでナイフのように、何かのトドメを刺すような響きを持っている気がします。「一つのことを極められないダメ人間」と相手を全否定するような。

私が2015年にDiVE.tvという団体を立ち上げたのは、私自身が感じていた“日本社会の息苦しさ”を少しでも和らげたいという思いが動機でした。日本は、電車が1分遅れただけで謝罪アナウンスが鳴り響くような完璧主義の国ですので、「中途半端」「適当」「カオス（雑然としていること）」などは基本的にNGです。一方で、個性よりも協調性が重んじられるため「曖昧」はOK。逆に「出る杭は打たれる」という言葉がある通り、リーダーでない人が目立つことをすると白い目で見られます。そうしたことは、たとえ日本で生まれ育った日本人であっても、“息苦しい”と感じる人が少なくありません。私のように。

DiVE.tvでは、日本に住んでいる様々な国の人たちの文化を動画にしてFacebook等にアップしています。それは、「日本はすでに多文化だ」という事実をアピールすることで完璧主義者の頭を柔らかくするため。「実はすぐ近くにいろんな価値観の人がいる」「物事の良し悪しは一つの物差しでは決められない」「よって完璧なんてあり得ない」というメッセージを、全ての動画の裏側にくっつけています。

しかし本当に深刻な息苦しさを感じているのは、私のような適当主義者ではなく、外国ルーツの子供たちだと気付かされる出来事が3年前にありました。取材で知り合ったブラジル人学校の先生から「高校生にジャーナリストの仕事について話してほしい」と頼まれ、5人の生徒が私のオフィスにやってきた時のこと。一通り話し終えて、私からも生徒たちに質問しました。

「ブラジルの文化は、何が好きですか？」

すると一人の男子生徒がポルトガル語でぼそっとつぶやきました。

「ブラジル、きれい」

「どうして？食べ物もおいしいじゃない？」

「食べ物はいいけど」

それ以上ブラジルについて語ろうとしない彼に、私は「日本は？」と恐る恐る聞きました。彼は少し考えた後、「今は21世紀なのに、日本にはどうして未だに差別があるんですか？」と逆に私に質問したのです。

後に私は、彼のような若者は珍しくないことを知りました。親に連れてこられた日本でいじめなどに遭い、親にも学校にも相談できず、言葉は話せても勉強はついていけない、自分のことを本当にわかってくれる人がいない、日本にも母国にも居場所がない…そうやって鬱病になったり自殺してしまう若者がいます。その苦悩の深さは、想像すら及びません。

彼との出会いから数ヶ月後、スタッフ会議の中でDiVE.tvオリジナルのキャンプをしようというアイデアが生まれ、実現に向けて動き始めました。名前は「It's ME Camp」。誰に何を言われても「これが私よ」と自分に自信をもってほしい、というメッセージを込めています。一昨年の初開催時はブラジル人学校の生徒10人が参加、去年は公立学校に通う生徒も含め6カ国に各ルートをもつ中高生が20人集まりました。3年目となる今年は50人の参加を目指しています。

キャンプの参加対象者たちは、学校や日常生活の中で、様々なことが「中途半端」だと捉えられがちです。日本のことしか知らないのに見た目は外国人、一応2ヶ国語を話せるけどどちらもイマイチ、というように。それは周りから言われる場合も、自己批判する場合もあるでしょう。そしてその中途半端感が、いつの間にか癌細胞のように心の免疫力を奪ってしまう…。

癌を克服するためには2つの方法しかありません。手術や薬で除去するか、自己免疫力を高めて消去するか。言わずもがな、It's ME Campは後者です。「中途半端？ だからどうした？」とみんなで笑い飛ばすこと。それによって自分を受け入れ、肯定し、可能性を探ること。いわゆるエンパワメントが、私たちにできる治療&予防の方法なのです。

同時に、私は「中途半端」を否定したくはありません。若い時はコンプレックスかもしれないけれど、中途半端を極めればジェネラリストになれるから。そしてジェネラリスト（つなぎ役）こそが、スペシャリスト志向の強い日本では特に重要だと思うからです。

価値のない人間なんて、世の中に1人もいない。そんな単純明快な真実を、It's ME Campを通して叫び続けたいと思っています。